〔研究論文〕

多様性が生きる心理的に共有された「一つ空間」という考え

（優しい環境学序説Ⅲ）

高師　昭南

〔Artcle〕

The services to lead us to a life-oriented, Co(or Echo) - existence world

Akinami　Takashi

Abstract

This paper attempts to determine the design principles to inspire a life-oriented co(or echo) - existence world, suffocated nowadays among the profit-oriented society, basing on a concept reading “vital contact to reality” (Eugene　Minkowski)　and “experience”(John　Dewey) into the communication theory by Erich Jantsch.

Our present profit-oriented consumer society has been expanding and advancing itself with the assistance of technological development, to creating and stimulating the desire to buy goods and to manipulate world, which is ironically depriving us of settlement and composure in compensation for egoistic gratification to be speedy.

The most substantial, serious problem to which we must pay attention is the fact that the development of technology alienating us from the earth (nature) has been eroding “distance perception” which is the basis of ethics, experience namely the possibility of wisdom, because “distance perception” is spreading not through air but along the physical earth (as Ulric Neisser examined and certificated).

Can we take back distance perception, our life-oriented, co(or echo)-existence world ?

はじめに

この見なれた花、聞きなれた小鳥の歌声、思い出したようにときどき輝く空、思い思いに違った石垣にかこまれて、それぞれ趣をもつ鋤き返した草深い畑――こういうものこそわれわれの想像の母国語である。つかのまに過ぎ去った幼年時代の形見である解きほぐし難い微妙な連想をすべて荷なった言葉である。今日深々と伸びた草の葉に輝く日の光を見るわれわれの喜びにしても、もしそれが、今なおわれわれの中に生きて、われわれが、目前に見るものを愛に変える遠い昔の日の光や草の思い出に連なるのでなかったら、それは年とって疲れはてた心が僅かにぼんやり感ずる程度のものに過ぎない

であろう。（ジョージ・エリオット『フロス湖畔の水車小屋』より）

瞬く間にすべてが変わってしまい「見なれた」ものなどなくなってしまう今日。
はたして我々に「思い出」などというものが残るのだろうか。もし、それがない、あるいはかすかでしかないとしたならば、「愛に変える」何があるのだろうか。「今日という日を消し去るかたちで明日という日がやってくる」[*1] 今、目前に見るものを愛に変える何かを、我々は持っているのであろうか。喜びにしても、疲れはてた心が僅かにぼんやり感ずる程度のものにすぎなくなってきているのではないか。

＜とどまれる＞今において「想像の母国語」となり、生きる力の生みの母となる大切にされた自然、大地,諸々の事物は、「結果へと急ぎ」、「意味（meaning）へと急ぐ」今日、意味（sense）の次元を喪失しつつあるといえよう。だが、意味（sense）を失うとは文字通り、われわれの響存性の基盤たる「感覚」を失うことに他ならない。刺激の感覚のことではない。想起性を基盤とする多様性の心理的共有としてある感覚運動性 [*2] つまるところ精神的生命力のリズムのことである。

それにしても抵抗freeあるいはスピード化を趣旨としてきている「便利」という「隔離化して、つなぐ」非ふれあい傾向の魅力はやっかいである。
たしか宮部みゆき『鳩笛草』の一節かとおもうが、一度道具を手にしたら、人はそれを捨てて戦うことは出来ない、とあったが、制作の道具はともかく戦う道具（我々の多くが手にするのは競争を含めて戦いの道具である！）は「それが自らを滅ぼす」と知っていても捨てて戦うことは出来ないという意味で道具は麻薬である。道具の本質は「便利」であるゆえに、「便利」は麻薬というべきか。だが、考えてみれば麻薬でないものなど存在しないのである。問題はそれが「sense」あるいは想起性を基盤とし「多様性の心理的共有」としてある精神的生命力の活性化とどう共存できるかと考えた方が現実的であろう。そう考えると、「オアシスのある生活砂漠」とでも現代社会を認識し、オアシスの可能性原理を探求しデザインすること―それが本論のテーマであるが――はそれなりに意味があろう。

2008年10月13日の朝日新聞は、１面のトップ「囲われた街　買う安心」の見出しで神戸にゲーテッド・コミュニティー（要塞の街）登場の記事を載せている。監視カメラの街路や小学校はもう一般。そうして街区全体が。ここまで来ている・・・・。
2001年12月新宿で、CD店に爆弾を投げ込んだ少年の言葉「人が壊れるのを見たかった」は当時とすれば、来るべき時代を予感させる象徴的なものであったが、2008年の現在、池袋、秋葉原、宇都宮と起こっている無差別殺人を見るかぎり「破壊」の欲望は常態化しているといえる。正確な数字は今手元にないが、近年のネット自殺者の増加もまた「破壊」の欲望の常態化を示している。山田の説を待つまでもなく破壊の方向が逆向きだけで根は同じである [*3]。

1　D・J・ブーアスティン、後藤和彦訳『過剰化社会』東京創元社、1980年
2　感覚運動性　ユジューヌ・ミンコフスキー（注16参照）は実感の根拠に＜触覚的なもの＞を考え、それは触覚とは区別されるものであると述べているが、その＜触覚的なもの＞による営為が生命的接触という彼の概念であると私は理解しているが、それがリラックスした状態で相手とふれあう運動性において働くと見たのが、この感覚運動性の概念である。
3　山田和夫『「ふれあい」を恐れる心理』亜紀書房、2002年

「人を壊す」とはもちろん自らの「人格を壊す」欲望の行動であるが、人が本来的にもつ「攻撃性」[*4] がそのエネルギーを知性へと昇華させるのではなく、「人格破壊」へと社会病理化している現在、何が、そうさせるのであろうかと問うことは充分意味のあることであろう。問い方により答えも自ずと異なるであろうが、私はそのことを、「生きている」実感の問題として考えたい。

もちろん、生きているという実感は、ともに生きているという実感以外ではありえないが、競争社会のなかで「ともに」というそのことが疎外される状況に我々はある、というのが私の認識である。

Ⅰ　現代社会素描　～「隔離化する」ことに急ぐ世界～

倫理は洋の東西を問わず、自己の存在は世界(神、世間、共同体と名を変えようと)に負っているということが元観念となって成立するものであるが、その「負」を否定すべきものとする今日、世界の秩序が不透明化するのは当然と言わねばならない。そうしたなか、上記の「囲われた街　買う安心」のゲーテッド・シティ（要塞の街 [*5]）は一例であるが、それだけでなく、ケイタイなど通信機器による、抵抗の受動がついてまわる「表情」を捨象したコミュニケーション形式にもいえることであるが、隔離化して、安全・安心を確保しつつ、つながる方向へと世界は今急いでいる。「意味へと急ぎ」「結果へと急ぎ」「隔離化へと急いで」いるのである。

だが問題はパラドキシカルである。精神病理学者の木村敏は統合失調に現代日本人の精神傾向はあり、それは「間あいだ～ま」の喪失によると分析している [*6] が、「隔離化へと急ぐ」ことは、この間（一種の緩衝地帯。ステアリングに見るような’遊び=広辞苑には、機械の部分と部分とが密着せず、その間にある程度動きうつる余裕のあることとある’の部分（下線高師）。多様性を共有せんとするやわらかな緊張を孕んだ間主観的な気分状態、状況）の喪失を急ぐことでもある。なぜならばそれは「動きうつる余裕」の剥奪だからである。

隔離化して、安心・安全を確保しつつ、つながろうとする傾向は、ある意味で危険の受動である「ふれあう」こと=その響きあいのうちに表情の受動を介して「思い」を確認し、確かなる加減と頃合を知ろうとする精神的生命力 [*7] の次元と逆方向の行為である。（保護貿易をはじめ「保護」の必要はある程度認められるがそれは「間」を育てる間の問題であり、）隔離化に委ねられた精神の存在形式はしかし人間育成よりも排斥、喪失であり、精神的生命力の空洞化をもたらす。

ここで現代社会の病理を分かりやすく説明している二人の見解をあげておきたい。

社会学者宮台真司は適応論の立場から、現代の我々の社会生活をおよそ次のように説明している。「流動化増大を受けて、乖離化と（軽症）鬱の傾向、ノイズ耐性と免疫の低下、そして他者不在でも欠落感を感じない現象が、特徴としてあげられる。流動化増大とは、ルールandマニアルで事を運ぶ社会システムの浸透であり、交換可能性の開発を通して加速化する経済効率第一主義のことであるが、反面ことさら私でなくても事足りるところから、本来の自分を見出しえず、自分探しに陥入する。一方仕事はマニアル化されようとも、自己責任による競争激化の社会にあって、負担は減るものではな

4　ジーグムント・フロイドの孫の精神科医アンナ･フロイドは「攻撃性」を、昇華されて「知性」となる人間の本能的エネルギーと見た。山田前掲書参照。
5　小学館『和楽』2008年11月号　にはセコムホームライフによる大田区久が原の「ゲーテッド・タウン」が紹介されている。
6　木村敏・坂部恵監修『身体・気分・心』河合出版　2006年　参照。
7　精神的生命力　感覚運動性が気（き）としての志向性をもった状態。

く、しかも交代不安のもとストレスは常態化している。[*8]」

見田宗介は環境論の視点から、現代の市場社会はモード値を操作することで欲望創出機構を維持すべく、消費することと「使い捨てる」こととを直結させつつ、使い捨てられた様を意識から遠ざける仕掛けにおいて社会を維持する―「環境と生態系の問題を正視しないこと、見えない地域、階層や世代の犠牲へと間接化し、不可視化する現代社会の自己欺瞞の光学内に自閉して」と指摘する[*9]。見田がそう述べたのは数年前。分からないことや周囲に対して、「そんなの関係ない!」（小島よしお）と無関心であることを肯定し、自分サイズのことのみ関心を持つ2008年の現在、不可視化するのではなく、むしろ問題を自虐的にゲームとして可視化している感さえしなくはない。

以上にかぶることになるが現代社会の病理確認の意味もこめて、私なりに、現代の麻薬?「便利」と「ともに生きていることの実感」の関係について、「スピード競争社会」「デジタル化によるナビゲーション社会」を切り口に、少し述べておきたい。

デジタル化によるナビゲーション社会つまり、誰か、何かがやってくれる社会。スィッチを押せばご飯も炊けるし、お風呂も沸くという便利な社会。ルールandマニアルもまた活用論からみれば、デジタル化されたナビゲーション。その本質に「はみでる」をもつ現実に対して、即応の楽しい適格を欠いたつまり創意工夫を締め出した、response（応答、責任）回避の構造。責任を回避するべくマニアルは微にいり細にいるとともに、それ以外はやらない硬直した人間行動をつくりだしている。

便利―しかし現実はいつも二律背反的。便利とは、アフォーダンス力（姿勢反応において世界を感じとり工夫し即応しようとする力）において生きる姿勢ではなく、刺激において機械的に動く状況である。アフォーダンス力において生きるとは、「ふれあう」ことが生み出す動いて居る、つまり「居る」を内在した動き（時々刻々に居所あり。それが生きているということの実感ではないか）の状態であり、時々刻々を手段としてよりも過程として生きることである。時々刻々に成就あり[*10]、である。それが、希薄化することで「悪に強きは、善にもと」というような厚みのある人情の生きる魅力はそこにはない。タバコは害になるとなれば、社会から閉め出すべきいけないものとしてしまう、いわばデジタル化された人間存在を生み出すシステムといってよいであろう。

便利は、欲望創出機構と一対のスピード競争社会にあって麻薬以上に始末に終えない「麻薬」である。スピードが二倍になれば心理的距離は二乗倍になってものごとを、「人」化ではなく「物」化する。

便利で確かに抵抗は軽減されるあるいは排除され快適であるが、それは一方でスピードを加速化する、もっと言ってしまえば、競争のスピードを加速化してストレスフルな状況を作り出しているメカニズムの一部である。それは、「節度」はやかましいおじさんと敬遠され、人間的規模を超えて、諸事が進行する今日、人間破壊を生み出す元凶ともいえる。

名古屋大学研究室は2003年小中学校の一般教員のうち「バーン・アウト（燃え尽き症候軍）傾向が強い人」が１割、「バーン・アウト（燃え尽き症候）予備軍」が４割という調査結果を伝えている[*11]。現在この傾向は一層強まっていよう。ここで思い出すのはポール・ビリリオの言葉、「スピードは暴

8　平成16年12月24日　ESRI―経済フォーラム　議事録より要約。
9　岩波講座・現代社会学25『環境と生態系の社会』P10
10　道元禅師の言葉
11　名古屋大学今津研究室　「校長・教頭・一般教員のストレス調査(要約)」2003・3・25

力の異名である」[*12]。2008年日経BP社の調査では、ITプロの８割がこのままではストレスが限界に達すると答えている（ITプロニュース2007・4・25）。

2005年８月20日の朝日新聞といささか古いが、会社員の６割がストレスをかかえているアンケート結果を伝えている。従業員100人以上の全国１万社対象、男女９、407人の回答結果である。1999年言ってみれば「ゆとり」政策が始動して2008年の今日まで、統計は反「ゆとり」を証明する「鬱症・ひきこもり」、中高年の自殺率、凶悪犯罪率の増加を伝えている。

スピード競争社会―今日を消すかたちで明日のくる現代[*13]は、思い出が希薄化する、「思い」など大切にされない社会。否、何も大切にされない社会。ただ、求められるのは、欲望を刺激してそれを明日への活力とする生き方。小さな子供にまでストレスフルの状況は広がっている。ストレスは言うまでもなく「ともに、味わうとしてある生きている実感」への回路を遮断した状態である。

現代社会は以上のような病理をかかえていると私は考えている。

Ⅲ　痛いから転んでみること

ダンスのダンスたる所以は、日常の習慣的身体が結果主義の目的的行動と安全をはかる意識によって閉じる傾向にある身体を開くこと、いわば「痛いから転んでみること」で次には工夫を考える身体の自然を復活させることで、身体に世界を感じること、そのときの新鮮な驚きにおいて、新鮮な人間になることである。それは、日常を視界の外に置き意識から遠ざける非日常の楽しみ―レクレーション―が与えるものとは異なるいわば超日常の営為である。re-creationとはそういうことではなかったか。

夏、クーラーの効いた部屋にいるとは、冷蔵庫に入った人間。鮮度が落ちるのをいささかは防げるかもしれないが、新鮮になるわけではない。

今、身体に世界を感じる超日常は、出かけていって初めて出会えるものとなっているが、かつては超日常の精神的生命を基盤として日常が成り立っていた。修業（行）という身体の文化があった時代のことである。今や物語でしかないのかもしれないが、現代を照射する一助として覘いておきたい。それは、人が一人前として社会的認知を得るための具体的な技術の習得とともに、身を挺して生きる覚悟鍛錬の場であり、人間一生が修業（行）であるという心の持ちようを教える場でもあった。技術と覚悟の「程」は、より優れた先人、先輩の生き方、身体の「運び方」、もののこなし方を「基本」としてそれを、心の内であるいは身体に繰り返すことで吟味し、自分の身丈にあったこなし方等を作り出す作業を通して測定された。現実としては、先人、先輩のやり方に対する尊敬の念なくしてはやっていけない行為である。そこにはむしろ、優れたものを他者の内に発見し確認せんとする積極的な姿勢が自分をつくりあげていることを忘れてはならない。方法論としては、型の文化であることにより、小さく固定されかねないという意味で両刃の剣であるが、日常をこえた風体の伸びやかさは、型という目標があって創造されるという逆説の見極めにおいて高度の文化であったと言いたい。修業（行）の段階はそのまま身分階梯となっていたこともあり、平等思想のもとで、封建的と一蹴される

12　ポール・ヴィリリオ『速度と政治―地政学から時政学へ』市田良彦訳　平凡社　1989年
13　ブーアスティン前掲書

一方、知恵なし形なし勝つことのみが課せられた世界が現出する。要となっていた倫理（もともとは社会に負っているという観念に基づく!）も放棄された結果が現在の、自由勝手の無秩序に近い心の状況であることを付け加えておきたい。

ついでながらそこにある型や繰り返しは、制作の次元を開き、唯一、かけがえのない個性の「美」をつくりだす行為でもあった。それを身体的主体的に実践する者にとってはである。ジル・ドゥルズは言う「反復が存在するのであれば、反復は、一般的なものに反する或る特異性、個別的なものに反する或る普遍性、通常的なものに反する或る特別なもの、変化に反する或る永遠性を同時に表現している。あらゆる点で、反復とは侵犯（トランスグレッション）なのである。反復は、法則を疑わしいものとみなし、より深く、より芸術的な現実のために、法則の名目的あるいは一般的な性格を告発するものである」[*14]。

かくてそれは、日常を相対化しつつ、我々の精神的生命力の拠りどころを求める芸術行為（特に「生きた過程」の問題において）に連なる問題と見ることができる。と言うのも、

芸術とは、全体を構成する部分･過程が内発的に前進的衝動性を生じさせつつ、有機的、蓄積的に進展して終局をむかえる一つの美的認識の経験であるゆえに（『経験としての芸術』より要約 [*15]）。

Ⅳ　生活砂漠のオアシス（１）～コミュニケーションの臨床次元～

厳し過ぎる。修業（行）は、ふれあいの間（ま）に起きる響きにおいて「加減」「頃合」「本物」を探り当てるべく、いわば「痛いから転んで見る」感覚運動性の行為として抵抗の受け入れだからである。傷つくまいとして、あるいは競争意識に疲れはてストレスをかかえて内に閉じがちな現代人にとって、抵抗を抵抗として受け入れられる状況に今いない。

しかし精神的生命は、抵抗なくしては生まれ得ないものである。この問題を考えるに関係することとして、ここに三人の言葉を上げておきたい。

離人症 [*16] の患者を診断するなかで実感の核心に「生命的接触」をみた、フランスの現象学派の精神医学者ユジューヌ・ミンコフスキーの次の言葉、

「相互性における自己と他者」は、たった一人の「私」よりもはるかに本源的な現象であり、この

14　ジル・ドゥルズ『差異と反復』P21　財津理訳　河出書房新社　1992年

15　ジョン・デューイ『経験としての芸術』春秋社　1969年

16　離人症　フランスの精神科医ユジューヌ・ミンコフスキー『精神分裂病』は現象学的視点より、３つの形式的能力、つまり理性的能力、感情的能力、感覚的能力からなる構造として人間の行動を見た。理性的能力は、事物に向かいそれを対象化し分析総合する能力、感情的能力は人間的な出会いと観想、共感、中庸の能力、感覚的能力は、宇宙の響きを我々に届かせる生成の能力であり、我々のうちに持続する生命の流れを生むところのものであるとした。生命的接触は、特に感覚的能力と関係する現象であるが、その不全状態が「離人症」。患者の言葉を借りて、その状態を説明している、「私はそれを理解することができるが、体験することができない。人びとは私のまわりで無言劇を演じているようだ。しかし私はその外にあって、それに参加していない。私には判断力があるが、生命の本質がない。……。私はあらゆるものと接触を失ってしまった。価値の観念、困難という観念が喪失した。……。私はもう外界のなかに入って身を任すことができない」（ユージューヌ・ミンコフスキー村上仁訳　みすず書房　1954年　P87）
この患者は思考力、判断力についてはまったく問題がない。ただ生きているという実感がない。ここに、私たちに実感をもってものが見える、聞こえるということは、視覚、聴覚だけの問題ではなく、＜触覚的なもの＞＝感覚運動性が共同してはじめて成り立つ現象と考えることが出来るといえよう。

「私」は、たった一人でいるかぎり、実際にはなんの意味もない。
（『精神のコスモロジーへ』中村雄二郎訳　人文書院　P194）
実のところこのことは、アイデンティテイの問題そのものである。R・D・レイン『他者と自己』をうけて鷲田清一は言う

「自己の同一性、自己の存在感情というのは、日常的にはむしろ、（眼の前にいるかいないかとは直接関係なしに）他者によって、あるいは他者を経由して与えられるものであって、自己のうちに閉じこもり、他者からじぶんを隔離することで得られるものではない。他者から隔離されたところでは、ひとは<自己>を求めて堂々めぐりに陥ってゆく。みずからの尾を呑み込みつづけるウロボロスの蛇のようなグロテスクなかたちでしか、じぶんにかかわれなくなるのだ。」（『「聴く」ことの力』P94 阪急コミニュケションズ　2006年）
以上をまた行為の問題として考えれば、コミュニケーションそのものである。だがそれは、主体が前もって予定していた意図を実現するべく行なう「説得のコミュニケーション」ではなく、「呼応する生命のコミュニケーション」である。

「コミュニケーションとは与えるものではなく、相手の対応する生のプロセスを喚起する自分自身の提示、自分自身の生の提示に他ならない」
（エリッヒ・ヤンツ『自己組織化する宇宙』芹沢高志訳 工作舎1986年　P398）

いずれの場合にも共通することは、抵抗受動の能動性である。だが先にも述べたように人は今、抵抗を抵抗として受け入れられる状況にない。加速化するスピード競争社会にあって過緊張状態にある一方で、ナビゲーション社会つまり抵抗を減らすことを価値とする社会ゆえの「ノイズ耐性と免疫の低下」（宮台）状況にある。結果、ストレスの精神状態・状況と、傷つくまいとする心理的傾向とが重なって、表情が主役ともなる呼応のコミュニケーションを避け、表情を捨象した「隔離化して安全・安心をはかりながら、つながる」傾向を肥大化させている。
だが表情を捨象したところには、生命（いのち）そのものでもある「思い」も生きられない。表情を持とうとすれば、「ふれあう」こと、更に言えば生命（いのち）にふれあうことは避けられない。なぜならば、表情は、「ふれあう」を契機として働く感覚（sense）において世界を、響きとして受け取ることそのものだからである。
生は響きあいにおいてしか立ち上がってこない。ゆえにヤンツ的「コミュニケーション」はその響きあいの必須条件として多様性に開かれた受容姿勢「見ている、聴いている」による「ふれあう」空間を必要としている。
「ふれあう」とは、多様性を実感していることであり、響きあう空間であり、「こもり」を仕掛けとしておきる空間の職人性（アフォーダンス）である。それは一時的に競争社会から脱落して「こもる」ことで「思い」が息を吹き返し、多様性が見えてくる時間である。当然「さわる」とは区別される。
誤解のないよう。ふれあうは、距離をおいた者同士の対等な、多様性を認め合った、響きあうことを現象とする関係である。身体的な接触も、「響きあう」を現象する限りにおいて「ふれあう」の一つのかたちであり、あるいは本源的なかたちであるともいえるが、身体的な接触がそのまま「ふれあう」ではない。更に言えば直接的な物理的な距離は関係ない。「ふれあう」は、そのうちに表情を浮

かび上がらせる時空である。

考えてくれば、精神的生命力はいつもアンビヴァレントな問題なのである。「見られる」「聴かれる」は「心の内を見透かされそう」で緊張をもたらす。だが、「みられる」状態「聴かれる」状態こそが、その社会的促進力（social facilitation）において精神的生命力の糧となるのである。緊張がなければ、精神的な集中もまた開放感もない。誰も見てくれない、聴いてくれない状況は逆に、ふれあいを求めて暴力化する。それが秋葉原の無差別殺人である。

ここに「ふれあう」―「見られている」「聞かれている」―を除去するのではなく、和らげられた「ふれあう」――「見られている」「聞かれている」―にもっていく場つまり抵抗をなくすのではなく、受け入れられる抵抗の状況、「迎え入れられる存在」場の設定が課題となる。どのようなものを考えられるのだろうか。

このことを少し考えてみたい。

人は一人では生きられない。そのことを人はよく人という漢字を引き合いに出して、誰かに支えられて私たちは生きていると説明する。確かであろうが、このとき「誰か」は人の場合もあれば、人の思いということもあれば、人の温もりや気配ということもあろう。それが「相手の対応する生のプロセスを喚起する」（ヤンツ）と考えることは可能であろう。私はヤンツのコミュニケーション概念を今、精神生理学的レベルでうけとり、人の温もりや気配（以下「気配」という言葉で代表する）によって「ふれあう」コミュニケーションに注目したい。というのも現代社会にあって、我々は、どこか志向性がついてまわる人にも人の思いにも、重荷に感じ避けたいと感じてしまうからである。

気配において＜ふれあう＞とは要するに、人間関係で言えば、相互が気づかぬうちに無理のないかたちで参加して、場の「気分」を支えあい構成するということであり、産物？として、気づきにおいて多様性と人間的な温もりを感じる空間のことである。

「隔離化を急ぐ」こととは反対方向の「気配においてふれあう」ところの「気配によるコミュニケーション」、それは「思い」が息を吹き返せる次元、私は今それをコミュニケーションの臨床次元とよぶが、それと気づかずに一つ場を支えあい構成する気配の空間はいかなる仕掛け、装置を持っているのだろうか。気配によるコミュニケーション環境」、分かりやすく言えば「他者と居ても、お互いにリラックスできて居所ありの空間」、あるいは「他者と居ても居心地の悪くない空間」の仕掛け、装置の研究がテーマとなるわけだが、それは持続する生命のオアシスとして空間を発想することでもあると考える。

少なくとも二つの場があろう。一つは、抵抗の少ない動物や植物とのふれあい。もう一つはデザインとしてみれば、まさに多様性の生きる心理的に共有された「一つ空間」である。

それが尖った声、音、気分となって、イライラ感を募らせるのか、そうでないかは多分に心理的なものである。江戸時代、庶民の住んだ長屋の壁は薄いが、親しく暮していると隣の住人の話し声は、聴こえているのだけれども、聞こうともしなくなる。世田谷美術館は、車の往来が続く大通りに面しているが、間に樹木の緑の茂みあるだけで通りの喧騒が嘘のように聞こえない。カフェの観察を課題とした私のゼミで、ある学生が「カフェのバックグランド・ミュージックは目に見えない心理的な間仕切りとなって、泡のように一人一人を優しく包んでいる」と指摘したが、これである。

また精神の感染性あるいは模倣性とでもよぶものがあろう。たとえば神経質な人といると、こちら

まで神経質にイライラしてき、のんびりしている人をみると自然と優しい気持ちになるのは誰しも経験することであろう。

人びとが、のんびりする、あるいはリラックスする空間としてカフェがある。カフェはそのような空間として設計されている。次項ではカフェをモデルとして、「多様性の生きる心理的に共有された一つ空間」を考えていく。

Ⅴ 生活砂漠のオアシス（2）～「多様性の生きる心理的に共有された一つ空間」のデザイン～

「一つ空間」のデザインについて、少なくとも三つのパターンがあると私は考える（勿論それはどのパターンが優勢かというだけで、現実は互いのパターン要素を含んでいる）。それを実際のカフェをモデルとして示しておきたい。

A　山の辺・団欒型（モデル：鎌倉御成町のスタバCHAYA）

南面した板床のテラスに、長い軒庇が明暗の「あわい」をつくり、庭先の水をたたえた小さなプールがゆったりとした気分を誘う。水の傍では人はゆっくり歩むとは言われることであるが、たたえた水面が緊張をほぐしていく。コンクリート床ではなく、板床であることで自然と「ふれあう」自分になっていく。

世阿弥は「陰陽の和する所に成就あり」を見た[*17]が、これは環境設計にいう明暗の和する「山の辺」に相当しよう。

古代の潜王の行幸にはなぜ傘持ちがいて、長柄の大きな傘を王の頭上に差し掛けるのだろうか。

中国の風水思想によるとは言え古代の都市計画において南に展望の開けた北の、低山を背負った小高い位置に内裏が設けられていたのはなぜか。野点の傘とは何なのだろう。家の格を示すと言われた日本家屋の長い軒庇の出とは何なのか。

カウンター上部は、天窓を通して背後の低山を見せて、「山を背負って、前に明るい光景を」を演出している

17　世阿弥『花伝書』『花鏡』参照。

板床のテラスから室内を見る

室内からテラス部分を見る。天井の板は室内から軒庇まで続いて、「山の辺」を演出するとともに室内とテラス部分を一つ空間にしている。

公園で大きな樹木を背後にして前に明るく開けた光景を持つベンチになぜ人は坐りたがるのか。デザイン的に見た美しさの問題もあるが、すべてに共通することは、物理的に明暗の和する境（境地）に「暗」をバックにして人が立つということであり、心理的にはそれが落ち着いた中に華やかな気分がをもたらすということである。時間次元に視点を置けば、＜とどまれる今＞が演出されるということになる。世阿弥は演技の要諦について「目前心後」「離見の見」の言葉を残しているが、これも環境的に「暗」の位置にある観客に対して否応なく「明」の位置にある演技者が、落ち着いた中に華やかな幽玄の美を表現すべく、自らを場として内に明暗の和する心の環境を設計し「暗」の位置より演技する「明」を見る工夫である。

少し庇（つば？）の広い帽子をかぶった時のことを思い出していただきたい。あるいは西欧の建物で囲まれた、都市の居間ともよばれた広場の風景を思い出していただきたい。建物を背にカフェテラスが設けられているのはなぜか、ということになる。鎌倉御成町のスタバCHAYAはこうしたことを実に見事に実現して見せている。

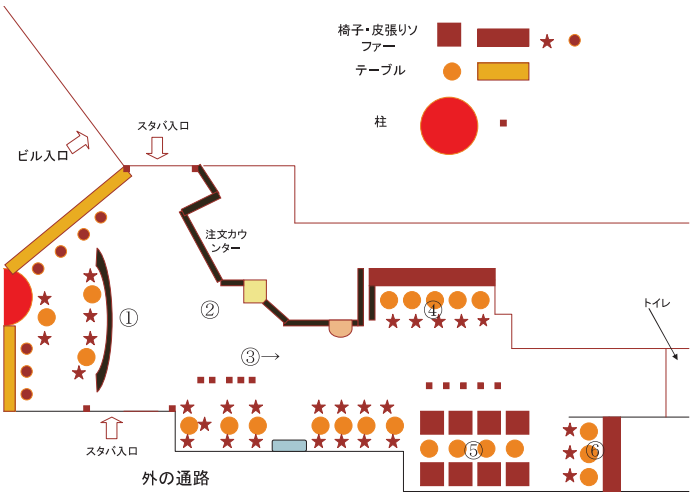
下の写真。CHAYA室内の雰囲気。団欒とは、円く囲むという意味であるが、CHAYAには室内スペースの大きさが余裕をもたせて、あちらこちらに幾つものリラックスした（心理的な）団欒の場を作り出して、それらが緩く響きあっている。

B　流域性形成型（路地型ともいえる。モデル：大泉スタバ）

流域性とは聞きなれない言葉である。「アルコーブ」[*18] を内蔵したそれを私の用語として次のように定義しておきたい。「流域性とは場所形成の仕方であるが、それなりに出来上がったものを組み込むユニットスタイルではなく、路地に見るごとく、流れとそれにともなう「遊び」において雑多なものを暮らしの様としてそれなりに見られるものに変容させる「自然的」統一の仕方である。」

流れとそれにともなう「遊び」において統一が起こると述べたが、美しい街並みであっても人通りがなければ周りの家々がバラけて見えることからも分かるように、この関係は動的である。流れとそれにともなう「遊び」とは、流動と制御（留まり）がそこに働いている流れ、という意味である。護岸工事をした直線の河では魚は、丈夫に育たない。流れに乗りあるいはふと休み遊ぶ岩陰を持った、環境設計に言う「アルコーブ」構造を内蔵した蛇行性の河では魚は種類も多く、丈夫に育つ。海流がぶつかる「潮目」には魚は数も多く、魚は丈夫に育っているといわれるが、流れと留まるが、「動」いて「居る」を実現する。流域性の形成とはそのことである。魚も人も変わりはない。歩きながら、ふと立ち止まって何があるのかなと幾分身体を傾ける。その身体の傾きが世界を新鮮に感じさせてくれる。それが路地である。流域性形成モデルとして大泉のスタバを見ておきたい。

大泉スタバ平面概略図



18　アルコーブ　もともとは部屋の壁の一部を入りこませて造った付属空間を意味する語であるが、ここでは人の背を包み込む凹面及び湾曲面一般を指す。それは直線に比して、ふれあい包み込まれる感覚において安心感とリラックスした気分を与えることで感覚運動性を回復、活性化する。なぜ、掘り炬燵なのか、なぜサンクンガーデンなのか、なぜカフェなどで隅の席から埋まっていくのか、なぜ魚の池の底に凹部を設けるのか、関連する問題である。『空間学事典』（井上書院　1998年）参照。セットバック構造もまた一種のアルコーブと私は考えている。

参道空間がそうであるように、突き当たりのトイレに向かって「奥」が演出されていると見ることもできる。その「奥」に向かってゆるやかではあるがうねりをもった通路が「路地」的な流動と留まりの歩行をもたらす。左の写真に見るように、通路のうねりの具合は、入口からカフェ中央部まではそれ以後に比べて、変化に富んだ魅力を示している。

ついでながら①の位置の写真（右の写真）を見てみるとその感は強い。

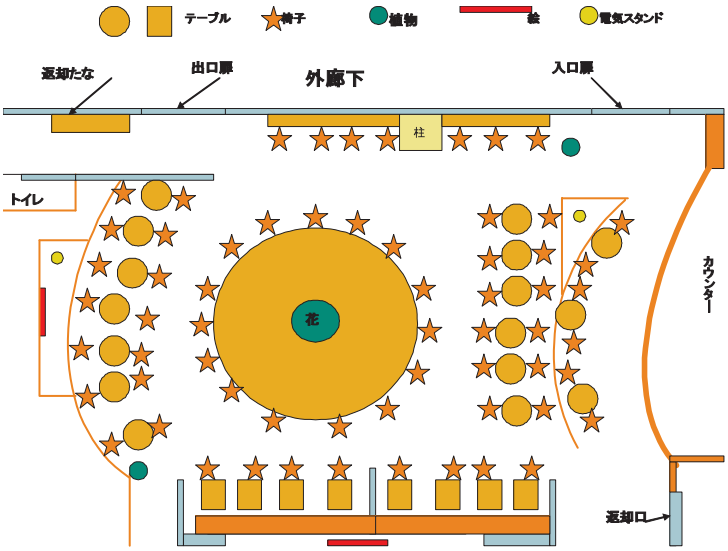
カフェの通路が大きく曲がる③の位置から奥を見てみよう。区切られながらつながった幾つかの空間が、和やかな「見る－見られる」、「聞く－聞かれる」の心理的に共有される一つ空間をつくりなし緩く響きあっている。

各空間の様子をのぞいて見よう。区切りのついたひと連なりの背のある革張りソファー（④の空間）もあれば、勉強には少し向かないかもしれないがゆったりくつろげるビロードの椅子の空間（⑤の空間）。

奥の垂直に背のある革張り椅子のある空間（⑥の部分。左の写真）を好む人もいる。

路地で見るように、身体を傾け覗き込む姿勢が、新鮮な驚きの世界を感じさせる。それは「経験」であり、今をリズムへと同調させる予期的知覚の躍動現象である。それは固定された椅子でパソコンの四角い平面を覗き込む生活が与えるもの「刺激」とは異なる。

C　劇場性形成型（輪になって中心を円く囲むかたちにおいて中心を共有しながら、見る－見られるを演出している。モデル：練馬駅ドトール）下、練馬駅ドトール平面概略図。



中央に大きな草花の鉢のある大きな円テーブルの周囲と奥（右下の写真部分）はまるで舞台。喫煙者の席。人は思い思いのスタイルでタバコをすう。タバコをすう人は、すわない人に比べてリラックスゆえに一般にスタイルを持っている。タバコをすわない人の席は写真手前外で、タバコをすう人をぐるり囲み見るかたちになる。見る－見られるが自然な感じでそこに展開し、全体にわくわくするような楽しい雰囲気があった。リラックスしている人はそれを見る人をそのスタイルにおいて、リラックスさせる。心理的に、見る人が見られる人になって舞台に登場する・・・。

リラックス出来るということは、また集中できるということでもある。

だが便利の制作原理である「隔離して、つなげる」はここにも入り込んでいる。下は、禁煙部と喫煙部を分けた現在の練馬ドトール。一言で言えば写真からもうかがえようが、華やかさを失ってみじめである。なぜならそこには、見る-見られるの響存性は失われ、孤立化が顕著となる。この孤立化は「敢えてこもる」ことで思いと多様性に開かれる受動的能動性の姿勢とは異なり、精神的生命力がやせていくだけのものである。大きな円いテーブルは無残にも二分されている。

禁煙席

喫煙席

写真は喫煙しない人の席とその雰囲気。これって一体何なのだろう。勿論「分離」が「隔離」にならず、独立性をもちながら離れ部屋となって響きあい「一つ空間」をつくっているドトールも実際あるが、練馬駅ドトールはただ「隔離」。あの華やかなわくわくするような美しさを失って、元も子もなくした?例といえよう。

おわりに

生きるとは、コミュニケーションすることであるとするならば、私はそのように考えているわけだが、気配において＜ふれあう＞は生きられる世界を支える根底である。それは水や空気のように、どこにでもあるようで、普段、自覚していないが、水や空気のように、それがなければ、我々の「生きられる世界」はその根底を失う、つまり生の実感が失われるところのものである。他者と居て優しい気持ちになる、ゆったりとした気持ちになるということは、お互いに響きあって共存する機能である感覚運動性が幾らかでも回復することを意味する。気配における＜ふれあい＞空間の研究は、気づきを通して、抑圧されやすい感情的能力や感覚的能力の自由を解放する仕掛け、装置の研究と位置づけられるのではないか。ついでながら、禅や茶室空間はこうした能力を強化し、一方ナビゲーション社会の空間は感覚運動性つまり＜触覚的なもの＞が弱い分、こうした能力を後退させる傾向にある。今回採り上げた誰でもが参加できる大衆向きのカフェとその空間の仕掛け、装置は「気配によるふれあい空間」の可能性をいささかなりとも具体的に示していると私は考えている。尚、「多様性が生きる心理的に共有された一つ空間」の観念は居間、病院の待合室、オフィス、否地球そのものにとっても大切! と考えている。